

通級指導教室のトレーニングを活用した小学校特別活動の提案

－ SDGs における「質の高い教育をみんなに」の実現を目指して－

Proposal for Elementary School Special Activities Using Training in School with Resource Rooms :
Realizing "Quality Education for All" under the SDGs

伊藤 大河¹⁾・伊藤 基晴²⁾
Taiga ITO・Motoharu ITO

概要

通常学級に「知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒」が6.5%程度在籍していると考えられる。これらの児童生徒に対して、学級全体の集団力や仲間意識、個々の集団適応力を高めることを目的に、通常学級において通級指導教室で実施しているトレーニングを活用することを検討した。教員研修における学級担任の意見をもとに特別活動の内容を抽出した結果、紙風船づくり、スティック運動、計算フラッシュ、黒板を写そう、お話ししよう、ペンシルドライブの学習プログラムが通常学級でも役に立つと評価された。その中でも特に、紙風船づくりとスティック運動を特別活動で実施することが望ましいことが示された。

キーワード：通級指導教室、自立活動、教科の補充指導、特別活動、学級活動

Abstract

It is thought that there are about 6.5% of "students who have no delay in intellectual development but show significant difficulties in learning or behavior" in regular classes. For these students, we examined the possibility of using the training provided in School with Resource Rooms in the regular classroom. During the teacher training, the learning program being worked on in School with Resource Rooms was introduced to the classroom teachers, and the contents of the special activities were extracted based on the opinions of the classroom teachers. The results showed that all the study programs introduced in the training, "Paper Balloon Making," "Stick Movement," "Calculation Flash," "Let's Copy the Blackboard," "Let's Talk," and "Pencil Drive," were evaluated as useful in regular classrooms. Among them, they indicated that they thought it would be desirable to implement paper balloon making and stick exercise as special activities.

Keywords : school with resource rooms, independence activity, supplementary guidance of subjects, special activities, class activities

¹⁾ 共栄大学 国際経営学部

²⁾ 元 ふじみ野市立東台小学校

1. はじめに

1.1 緒言

SDGs (持続可能な開発目標 / Sustainable Development Goals) は、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載されている2030年を期限とする開発目標であり、「誰一人取り残さない (no one left behind)」社会の実現を目指し、先進国も含めて国際社会全体で取り組むこととされている¹⁾。SDGsで示された17の目標のうち、目標4は「質の高い教育をみんなに」であり、すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進することを目指している²⁾。この目標4は10個のターゲットで構成されており、その1つ目には「2030年までに、すべての子どもが男女の区別なく、適切かつ効果的な学習成果をもたらす、無償かつ公正で質の高い初等教育及び中等教育を修了できるようにする」とある³⁾。

日本でも従来から、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進が行われている⁴⁾。特別支援教育は、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のために必要不可欠なものであり、同じ場で共に学ぶことを追求するとともに、個別の教育的ニーズのある幼児児童生徒に対して、自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できる、多様で柔軟な仕組みを整備することが重要であるとされる。文部科学省では、2012年に通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果⁵⁾をまとめている。表1に示すこの結果によると、「知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒」が、通常学級の中に6.5%程度在籍している。つまり、30人学級であれば1人ないし2人は「知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒」が在籍していることとなる。例えば、2011年における埼玉県では、義務教育人口約57万人のうち、特別支援学校在籍が約3.5千人(0.61%)、特別支援学級在籍が約6.4千人(1.02%)、通常学級在籍が約56.1万人(98.4%)という状況⁶⁾であるため、通常学級在籍者約56.1万人のうちの6.5%である約3.6万人が、「知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒」であることが推測される。これまで、特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室等に通学する児童生徒のみが特別な教育的支援を受けることが多かったが、インクルーシブ教育システムを構築していくにあたっては、知的発達に遅れはないものの発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒への対応が必要であると考えられる。

表1 知的発達に遅れはないものの学習面または行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合

	推定値 (95% 信頼区間)
知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で著しい困難を示す	6.5% (6.2%~6.8%)
知的発達に遅れはないものの、学習面で著しい困難を示す (A)	4.5% (4.2%~4.7%)
知的発達に遅れはないものの、行動面で著しい困難を示す	3.6% (3.4%~3.9%)
(B) 「不注意」又は「多動性・衝動性」の問題を著しく示す	3.1% (2.9%~3.3%)
(C) 「対人関係やこだわり等」の問題を著しく示す	1.1% (1.0%~1.3%)
知的発達に遅れはないものの、学習面と行動面ともに著しい困難を示す	1.6% (1.5%~1.7%)
A かつ B	1.5% (1.3%~1.6%)
B かつ C	0.7% (1.6%~0.8%)
C かつ A	0.5% (0.5%~0.6%)
A かつ B かつ C	1.4% (0.3%~0.5%)

注:内閣府「平成25年版 障害者白書(概要)」⁷⁾ P.7 図表11より引用

インクルーシブ教育システムに関する研究も積極的に実施されている。例えば土居(2021)⁸⁾は、バリアフリーやユニバーサルデザイン、インクルーシブデザインの本来の意味に着目して通常学級におけるイン

クルーシブ教育の方向性について探っている。その結果、指導者による多様な支援の提供、学び方の自己理解、学習者が選択・調整・決定する場の設定、授業デザインへの学習者の参画といった試みが、通常学級において、インクルーシブ教育の理念「多様性の尊重の強化」を実現する可能性をもつことを示唆している。また、酒匂（2021）⁹⁾は、インクルーシブ教育における「すべての子どもたち」という言葉に着目し、「一人ひとりが多様な価値をもち、その価値が学習に豊かさをもたらす場」であるととらえ、こうした認識がインクルーシブ授業の実践を支える可能性をもつことを指摘している。このように、インクルーシブ教育システムの構築に関する研究は各種行われているが、筆者らがこれまでに実施してきた研究における先行研究調査を踏まえても、通常学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する対応についての研究は十分に行われているとは言い難い。

一方、筆者らはこれまでに通級指導教室における様々な取り組みを実施してきた。1つ目として、通級指導教室に通う「聴覚障害から言葉の聞き取りが難しい児童X」、および“自分の考えや思いを表現できない児童Y”を対象としたトレーニングを考案した。その効果について検証した結果、児童Xに対して実施した「発音トレーニング」において、トレーニング実施前と実施後で有意差があり、そのトレーニングによってディクテーションの誤答数を減少させる効果があることが示された。また、児童Yに対して、パソコンの音声入力機能によるトレーニングを実施することで、問題が生じた際に教師へ自然に話しかけてくるようになり、児童が自発的に言葉を発することができる訓練となることが示された¹⁰⁾。2つ目として、児童Yを対象に、3Dキャラクターを用いたバーチャル会話トレーニングのシステムを構築した。そのシステムを用いてトレーニングを実施した結果、パソコンの音声入力機能による対話場面を設定することで、問題が生じた際に教師へ自然に話しかけてくるようになり、児童が自発的に言葉を発することができる訓練となることが示された。また、児童Yを対象に3Dキャラクターを用いたバーチャル会話トレーニングを実施したところ、スクリーン上のキャラクターとスムーズな会話が可能になった¹¹⁾。3つ目として、聴覚情報処理障害（英語表記:Auditory Processing disorder）が原因で、言葉の聞き取りが難しい児童Zの事例を取り上げ、児童の困り感の解消に向けての小学校通級指導教室における聴覚認知トレーニング（促音トレーニング・長音トレーニング・かけ算九九トレーニング・リピートレスントレーニング）を開発した。そのトレーニングについて検証した結果、一定の効果が確認され、児童Zは通常学級での生活において聞き取りで困ることはほとんどなくなった¹²⁾。4つ目として、通常学級に在籍する“知的発達に遅れはないものの発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒”への対応として、通級指導教室で取り組んでいる学習プログラムを学級担任に紹介し、その中から学級内の該当する児童に効果的なプログラムを学級レクに活用し、集団適応力を高める可能性を示した¹³⁾。5つ目として、通級指導教室で取り組んでいる学習プログラムを、幼児期から社会性の基本である生活習慣を身につけてきた保護者との親子ペアで実施することが、児童の社会性を高め、通常学級に適應できる力を向上させることを可能にすると考え実践を行った。その結果、通級指導教室で親子によるペア学習を実施することにより、児童の自己決定性が高くなり、学習プログラムの効果が高まる可能性が高いことを示した¹⁴⁾。さらに、通級指導教室に通っている児童の「不器用さ」の軽減に、通級指導教室で実施している学習プログラム（ウォーミングアップトレーニング）が役立っているのではないかと考え、児童の「不器用さ」に関する実態調査を行い、通級指導教室に通う過程でどのような変化があり、通級指導教室に通っている児童の「不器用さ」の軽減に役立っているのかを検証した。その結果、通級指導教室で実施している学習プログラムが、通級指導教室に通っている児童の「不器用さ」の軽減に役立っている可能性が高いことを示した¹⁵⁾。

筆者らが実施してきたこれらの先行研究を通して、通級指導教室での支援が適当であるとの判断を受けた児童・生徒一人ひとりに対して、在籍校（学級）での生活に適應できるようにするための指導内容（トレーニング）を開発・検証してきたが、これらの指導内容は、通常学級に在籍している「知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒」の集団適応力を高めることに役立つ可能性があるかと予想した。そのため、インクルーシブ教育システムを構築し、SDGsにおける「質の高い教育をみんなに」

の実現を目指す中で、通級指導教室で実施している指導内容を、通常学級にも活用することで、目標を達成するための1つの方法に成り得るのではないかと考えた。

1.2 本研究の目的

通常学級に在籍する「知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒」のうち、通級指導教室で児童の困り感や課題解消に向けた学習に取り組んでいる児童生徒の数はわずかであり、ほとんどがサポートを受けられていない現状がある。

一方、通常学級において、いじめの発生も問題となっている。いじめの様態別状況では、「冷やかしからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」が最も多く、続いて「軽く暴力を振るわれる」、「仲間はずれにされる」と続く¹⁶⁾。最も多い内容である「冷やかしからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」は暴力の火種ともなり、これらはコミュニケーション能力の低下に起因しているものが多い¹⁷⁾。これらのことから、「知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒」では該当するか否かに関わらず、通常学級における学級の集団力や仲間意識、個々の集団適応力を高めることで軽減できるのではないかと考えられる。

そこで本研究では、通常学級に6.5%程度在籍していると考えられる「知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒」への対応を念頭に、学級全体の集団力や仲間意識、個々の集団適応力を高めることを目的に、通級指導教室で実施しているトレーニングを活用した小学校特別活動を提案する。提案にあたっては、教員研修において、通級指導教室で取り組んでいる学習プログラムを学級担任に紹介し、学級担任の意見をもとに、特別活動の内容を抽出する。

2. 教員を対象にした通級指導教室における学習プログラムの体験

2.1 教員研修の目的と概要

先行研究¹³⁾で示した2017年の研修に引き続き、2018年および2019年にも筆者を講師とし、S県F市内の小中学校の教員を対象とした特別支援教育をテーマにした希望研修として、特別支援教育に関する知識の習得および通級指導教室における自立支援教材の体験を行う教員研修(120分)を実施した。参加者は2018年が32名、2019年が29名で、両年通しての参加者は11名だった。参加した教員には、研修前半に特別支援教育に関する知識の習得、研修後半に通級指導教室における自立支援教材の体験を実施させた。そして、これらの学習プログラムを通して、通常学級の特別活動で実施するための可能性を検討した。

2.2 教員研修の内容

研修前半では、特別支援教育に係る就学状況(通級指導教室数及び通級児童生徒数、通級児童生徒数推移、市内の状況)、通級指導教室の現状(難聴・言語通級指導教室、発達・情緒通級指導教室)に関する知識を習得する講義を実施した。特に本研究に関連する発達・情緒通級指導教室についての説明は詳細に実施した。具体的には、(1)学級集団に適応できるだけの基本的な身体機能や運動機能を高める学習プログラムと個々の児童が抱える課題の解消をめざした学習プログラムを実施し、通常学級の同級生と同じ行動ができ、同じ遊びを可能にすることを目標に、少しでも児童の困り感の軽減ができるような学習を実施していること、(2)学習の形態としては、担当教師と該当児童が1対1で90分間の学習を行い、保護者はその間、保護者控室のモニターを通して、2台のカメラから映し出される児童の学習の状況を見守っていること、(3)通級指導教室での学習内容は、学校生活で「最低限必要とされるであろう動き」を細分化し、学習プログラムとして位置付けていることを説明した。基本的な身体機能や運動機能の補充に関する学習プログラムを表2、実生活に即した補充課題に関する学習プログラムを表3に示す。

研修後半では、A. 紙風船づくり、B. スティック運動、C. 計算フラッシュ、D. 黒板を写そう（2018年のみ）、E. お話ししよう、F. ペンシルドライブ（2019年のみ、えんぴつ運転・字形バランス）の各年5つの学習プログラムについて、参加した教員に実際に体験してもらった。それぞれの具体的な内容について以下に記す。また、簡易的な説明は表2および表3の「具体的な学習活動」欄に記載している。

2.2.1 紙風船づくり

「紙風船づくり」は、作り方のプリントを自分で読み、内容を理解して、紙風船を作る学習である。通級指導教室での支援活動においては、当然のように児童が途中でわからなくなる場面がある。これまでは、「あきらめて、やめてしまう」という行動をとっていた。しかしこの学習は、わからなくなる場面の対処法を学習するトレーニングであると考え、通級指導教室では親子ペア学習で実施してきた。困った時「教えて、手伝って」が言えることで乗り越えられること、最後に作品が完成し満足感がえられること、計測した時間が上手になることで短時間にできあがることを体得させるトレーニングである。普段の学習活動で「ワークシート等」を活用した学習が多い中で、周囲と同じ学習活動がさせたいと考え実施している。これらの内容を教員研修で伝えた。

表2 基本的な運動機能の補充に関する学習プログラム

	指導内容	具体的な学習活動	学習のねらい	期待される効果	
1	ビジョントレーニング	的確な視覚情報入手	追尾・左右・上下・回転・両目寄せ運動（5秒静止）	教科書の行を飛ばさないで読む	音読・朗読等の読書力
				正確なノート記録	正確で、きれいなノート記録
				算数・筆算の桁をそろえる	基礎基本である正確な計算力
2	フィンガー体操	円滑な手指の動きで不器用さ解消	①カウント*両手親指から：パーとグーから	しっかり指の曲げ伸ばしができる	円滑な手指の動きで不器用さ解消
			②ジャンケン*パーとグー・グーとチョキ・チョキとパーの入れ替え	左右：違う指の動きができる	
				テンポ：ロー・ハイで速さに対応できる。	
3	ボール運動：運動機能補強・コミュニケーション力UP	相手の意識化・調整力	①ボールにぎり（突起つきと通常の2種類を左右交互に）	握力の補強・感覚感触の強化	コミュニケーション力UPと不器用さ解消
			②投げあげ左右片手・両手キャッチ	調整力と動体視力補強	
			③対面してのパス（ノーバウンドとワンバウンド）	相手を意識したSST	
			④ドリブル（両手・左右片手）	対象物をコントロールする調整力アップ	
4	スティック運動	バランス感覚・俊敏性・協調性	①手の上で棒を立てバランスをとる。（左右）	バランス感覚と耐久力補強	柔軟性のあるコミュニケーション力の養成
			②床の棒が倒れないうちに手拍子（俊敏性）	俊敏性と柔軟な動き	
			③2本のスティックでつくったロードを4種類のボールを転がし、往復させる。	SST（相手に合わせて）	
5	ペンシルドライブ	書く基本動作	①鉛筆の持ち方	鉛筆の安定した保持	筆圧が保てしっかりした文字が書け、日々の学習活動に生かす
			②えんぴつ運転（鉛筆の基本操作（4種類））	書く基本動作（①丸塗り②立て塗り③斜め塗り④横塗り）	
			③字形バランス	字形バランスをアップさせ、綺麗で上手な字を書く	

2.2.2 スティック運動

「スティック運動」は、バランス感覚・俊敏性・協調性を育むものである。その中でも「スティックロード」は、2本のスティックを左右の手に1本ずつ持ち、自分と相手の間に作った『ロード』の上に4種類のボールを転がし、往復させるものである。スティックロードを実施することで、『相手に合わせる・相手を気遣う』ということ学ぶSSTであり、柔軟性のあるコミュニケーション力の養成を目的としている。上手く行かない時や互いに失敗した時など、親子だから遠慮無く自然に「ごめん」などの言葉がけによるリアクションが取りやすい。学級集団の中でも、同じような状況において、自然に言葉がけなどのリアクションが取れるようになるのが目的である。これらの内容を教員研修で伝えた。スティック運動(スティックロード)の様子を図1に示す。

表3 日常生活に必要な補充課題に関する学習プログラム

	指導内容	具体的な学習活動	学習のねらい	期待される効果	
6	よく見よう	集中力と手先の器用さ・持久力	②ペグボード	空間認知等、事象を把握する力を育てる	目線と作業効率が向上し、学習活動に生かせる
			②問題解決	問題から手順を自分なりに導く力を育てる	空間認知等、事象を把握する力を育てる
			③先生の顔(絵)	基本的な絵画描写技能の向上	集中して、長時間取り組める気持ちを育てる
			④紙風船づくり*	説明を見ながら、手順良く作成する力を育てる	気持ちを軽減させる「教えて・手伝って」が言える
7	考えてみよう	語彙増加・発語量	①5分間しりとり*	思いついたことが言葉になる	質問に対して、すぐに言葉で返せるコミュニケーション力の基本力を育てる
			②計算フラッシュ	計算の基礎基本として、掛け算九九の補充と定着	算数学習に自信を持って正対できる
8	よく聞こう	聞き取り力アップ	リピートレッスン	6文字~26文字の指示語をしっかりと聞きとる	相手の目を見て、しっかり話が聞ける態度を育てる
9	お話ししよう*	会話力・考えをまとめる力	ランダムに表示される「お題」のお話しづくり	アクティブラーニングに対応できる話題づくりと会話力トレーニング	対話的な学習活動に参加でき、自分の言葉で考えが言える力が育つ
10	黒板を写そう*	書写力アップ	ランダムに表示される文章をよく見て、しっかり、ていねいに書き写す	6文字~26文字の指示語をよく見て、しっかり、ていねいに書き写す。適度な速さも必要。	教室で日々実施される集団学習のテンポについていけ、周囲と一っしょに学習活動ができる

注:「*」は、通級指導教室での支援において親子ペア学習も取り入れている学習活動

2.2.3 計算フラッシュ

「計算フラッシュ」は、掛け算九九を基本として考えた。通級指導教室の学習内容では、教科等の学習の補充は取り扱わないこととされている。したがって、算数学習の基礎基本として、2学年から学習する掛け算の重要性を考え取り扱っている。フラッシュカードを作成し、①ランダムに出題し、すぐに答えを発表する。②出題されたカードをみて、ワークシートに問題を書き写し、解かせる。の2つのパターンを実施している。ワークシートに書かせる時には、学習ノートを想起させ、前の問題と縦が揃っているか、「=」の記号が上下同じ長さになっているか等、ノート指導に役立てることが目的である。これらの内容を教員研修で伝えた。

2.2.4 黒板を写そう

「黒板を写そう」は、ホワイトボードに投影された短文(学校生活の基本的な姿勢等の内容)を視写する活動である。通級指導教室に通う児童は、視写に掛かる時間が長いため、通常学級において、黒板を書き写

すことが困難な児童が多い。そこで、この学習プログラムを通して、書いてあるものを見て、書き写す力を育てる。その際『よく見て、しっかり、ていねいに書く』ことを約束としている。1文字2秒を目標として活動を行っている。この学習プログラムで、授業の板書をノートに写す力を育て、授業についていけるようにすることが目的である。隣で同じように実施している親の結果と比較することで、大人が工夫して書いていることに気付くことができる。具体的には、枠の中心に書いていたり、下線に沿って書いていたり、字の大きさをそろえて書くことや、読みやすい字の大きさなどを見て理解させることが可能である。最後まで先生の話が聞けない児童の場合には、書き写す文章を投影するのではなく、教員が口頭で言った内容を書き取らせることによって、話を聞く訓練にすることも可能である。これらの内容を教員研修で伝えた。

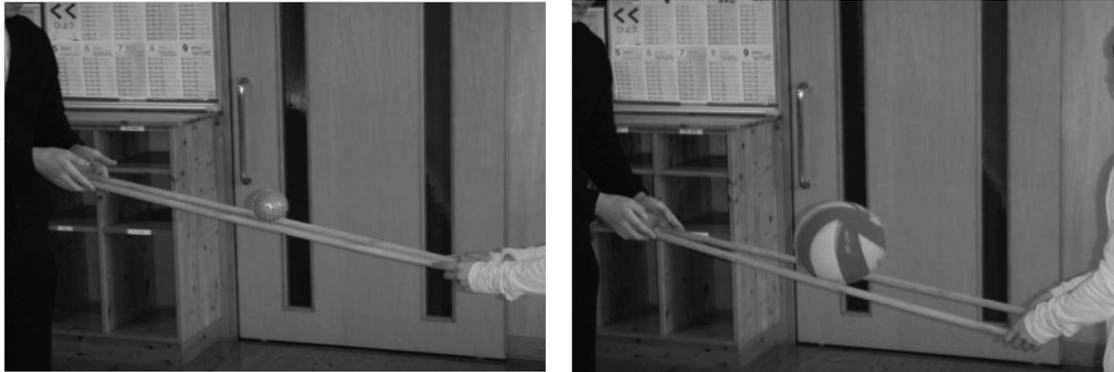


図1 スティック運動（スティックロード）の様子

2.2.5 お話ししよう

「お話ししよう」は、提示されたテーマについて40秒間で自分の思いついたことをメモし、その後テーマに沿ったお話を発表させる。発表については自己評価させ、より相手に伝えられる話し方を自分で体得させる。不足している内容については、教員から質問を投げかけ、それに回答させることによって、自分の話の内容が薄いことに気付き、徐々にメモの量が増えていく。これを繰り返すことで、短時間に自分の考えをまとめる力を育てるとともに、会話力を育て、自分の考えや友達・グループと相談をして考えをまとめたりする活動の中で、自分の考えを持ち、話し合い活動に参加できる能力を身に付けることを目的としている。この学習プログラムを通して、同じテーマであっても違う内容のお話でも良いことを学ぶ。それにより、正解しなければならないことへの恐怖心を取り除くことも目的としている。これらの内容を教員研修で伝えた。

2.2.6 ペンシルドライブ

「ペンシルドライブ」は、学習活動に不可欠な鉛筆で書く基本動作（丸塗り・縦塗り・斜め塗り・横塗り）を習得させ、筆圧を高め保てることをねらいとしている。また、字形のバランスを高めるために（左回りに円の描画、右回りに円の描画、右斜め線、左斜め線）の練習をさせることで、しっかりとした文字が書けるようになると考えた。これらの内容を教員研修で伝えた。ペンシルドライブの様子を図2に示す。

2.3 質問紙調査

研修後半で体験させた、A. 紙風船づくり、B. スティック運動、C. 計算フラッシュ、D. 黒板を写そう（2018年のみ）、E. お話ししよう、F. ペンシルドライブ（2019年のみ、えんぴつ運転・字形バランス）の各年5つの学習プログラムについて、自らが担当する学級での指導に活かしてみたいかについて5件法（活かしてみたい（5点）、やや活かしてみたい（4点）、どちらともいえない（3点）、やや活かしてみたくない（2点）、活かしてみたくない（1点））で尋ねた。併せて、ご意見・ご感想の自由記述欄も設けた。また、各年5つの学習プログラムについて、学級で取り組む時どの時間帯が適当であるかについて5つの選択肢（朝の会、

帰りの会, 業間, 昼休み, 学級活動)で尋ねた。併せて, 理由があれば理由を記入する自由記述欄も設けた。最後に教員研修全体を通しての感想を記入してもらった。



図2 ペンシルドライブ(えんぴつ運転)の様子

2.4 質問紙調査結果

A. 紙風船づくり, B. スティック運動, C. 計算フラッシュ, D. 黒板を写そう(2018年のみ), E. お話ししよう, F. ペンシルドライブ(2019年のみ, えんぴつ運転・字形バランス)の毎年5つの学習プログラムについて, 受講者が実際に体験した後に, 自らが担当する学級での指導に活かしてみたいかについて5件法で尋ねた結果, および通常学級において活用する場合, どの時間帯に実施するのが良いかを, 朝の会, 帰りの会, 業間, 昼休み, 学級活動の5択(複数回答可)で尋ねた結果を表4に示す。

それぞれの評価の理由を整理する。A. 紙風船づくりについて, 通常学級での活用が4.81(2018年), 4.82(2019年)であり, 通常学級で紙風船づくりを活かしてみたいという結果であった。その理由についての自由記述を, ユーザーローカルテキストマイニングツールによる分析¹⁸⁾(以下, 「AIテキストマイニングによる分析」と表記)を実施した。全ての自由記述の中から特徴語などを考慮してAIが重要だと判定した部分のみを抜粋して表示するダイジェスト機能で出力した結果, 「友達とのコミュニケーション作りに良いと思った」, 「通常学級でも十分活用できる」, 「相手を思いやることを学べるのでやってみたい」, 「苦手な子はいないのではないか」, 「友達といっしょだから完成するというのがいい」, 「他にも楽しい活動があったら知りたい」, 「いらいらする子の気持ちが少しわかった」, 「不器用な児童の気持ちが実感できた」, 「学級づくりにも最適な活動だと思った」, 「相手を意識して活動できた」の10点に要約された。活用時間については, 82.8%(2018年), 70.8%(2019年)が学級活動と回答している。その理由についての自由記述を, AIテキストマイニングによる分析を実施し, ダイジェスト機能で出力した結果, 「隣の席の子とささっとできる」, 「雨の日やアイスブレイキングで使えそう」, 「十分な時間をかけて行いたいから」, 「導入で使うとよいと思う」, 「金曜の朝学活で取り組んでみたい」, 「もしくは学期はじめの学活の時間に行いたい」, 「用意も簡単で, 取り組みの意図が伝わりやすい」, 「自立の授業で取り組みたい」, 「中学校では, ここしかないと思った」, 「落ち着いた時間の時が効果的だと思う」の10点に要約された。このように, 簡単に実施できるが, ある程度時間をかけて取り組ませることを教員は望んでおり, 学級活動の時間に実施するのが良いと意見が多かったものと推測される。

B. スティック運動について, 通常学級での活用が4.72(2018年), 4.63(2019年)であり, 通常学級でスティック運動を活かしてみたいという結果であった。その理由についての自由記述を, AIテキストマイニングによる分析を実施し, ダイジェスト機能で出力した結果, 「人とつながるということが実感できる」, 「きっとクラスでやったらもりあがるだろうなと思う」, 「レク的にできるので楽しめると思う」, 「協力しながらできることが良かった」, 「相手のことも考えられるようになる」, 「体育でも使えそうな活動だった」, 「学級でも楽しく取り組める」, 「物がそろえばぜひやってみたい」, 「『つながり』が意識できるのも良いと思う」, 「協

力できないと成功しない活動で良かった」の10点に要約された。活用時間については、65.5%（2018年）、61.5%（2019年）が学級活動と回答している。その理由についての自由記述を、AIテキストマイニングによる分析を実施し、ダイジェスト機能で出力した結果、「じっくりと時間をかけて取り組みたい」、「この取り組みも学級活動でやりたい」、「いろいろな子とやらせたい」、「体育の時間にもできそう」、「自立の学習としてやってみたい」、「これもシェアリングさせたい」、「クラスレクでやってみたい」、「自立活動でやっている」、「クラスレクとして取り入れやすい」、「学級開きで利用できる」の10点に要約された。また、昼休みや行間休みの時間に自主的に遊んで欲しいという意見も見られた。

表4 各学習プログラムの活用に関する評価結果

2018年：n=32 2019年：n=29		自らが担当する学級での 指導に活かしてみたいか	活用時間					
			朝の会	帰りの会	業間	昼休み	学級活動	
			割合（%）（複数回答可）					
		5件法 （）内は標準偏差						
A. 紙風船づくり	2018年	4.81 (0.48)	3.4	0.0	6.9	6.9	82.8	
	2019年	4.82 (0.45)	8.3	4.2	8.3	8.3	70.8	
B. スティック運動	2018年	4.72 (0.44)	3.4	3.4	13.8	13.8	65.5	
	2019年	4.63 (0.56)	7.7	0.0	11.5	19.2	61.5	
C. 計算フラッシュ	2018年	4.20 (0.69)	31.3	12.5	12.5	0.0	43.8	
	2019年	4.74 (0.53)	44.4	5.6	0.0	5.6	44.4	
D. 黒板を写そう	2018年	4.32 (0.61)	17.6	35.3	0.0	5.9	41.2	
	2019年	—	—	—	—	—	—	
E. お話しよう	2018年	4.24 (0.65)	19.0	33.3	0.0	0.0	47.6	
	2019年	4.70 (0.46)	19.0	42.9	0.0	0.0	38.1	
F. ペンシルドライブ	2018年	—	—	—	—	—	—	
	2019年	えんぴつ運転	4.52 (0.58)	30.4	13.0	8.7	13.0	34.8
		字形バランス	4.54 (0.71)	25.0	12.5	12.5	12.5	37.5

C. 計算フラッシュについて、通常学級での活用が4.20（2018年）、4.74（2019年）であり、通常学級で計算フラッシュを活かしてみたいという結果であった。その理由についての自由記述を、AIテキストマイニングによる分析を実施し、ダイジェスト機能で出力した結果、「授業の前提となる練習になる」、「該当の生徒も頭に思い浮かぶ」、「話をよく聞く学習にもなった」、「しっかり言える練習になるのでやってみたい」、「そろえて書くことの大切さを書くことで学べる」、「見ようという気持ちになる」、「正確に言わせるということは大抵だと思った」、「『見る』ことの大切さを痛感した」、「細かい過程を面倒がる児童がいるので試したい」、「その子たちの練習にいかしたい」の10点に要約された。活用時間については、43.8%（2018年）、44.4%（2019年）が学級活動と回答している。また、31.1%（2018年）、44.4%（2019年）が朝の会と回答している。それぞれの理由について、AIテキストマイニングによる自由記述の分析を実施し、ダイジェスト機能で出力した結果、学級活動と回答した理由は、「これもウォーミングアップ的に使える」、「算数の授業内で行いたい」、「朝の活動でも良い」、「1日の始まりに取り組みたい」、「授業中でないとできないと思う」、「算数の最初5分間でやっている」、「短時間でもできそう」、「算数の授業等でも使えると思った」、「1日のふり返りなどで使えるとよい」、「中学校では、ここしかないと思った」の10点に要約された。朝の会と回答した理由は、「1

日の始まりに取り組みたい」、「算数の最初5分間でやっている」、「算数の授業等でも使えると思った」、「短時間でもできそう」、「中学校ではこしかないと思った」、「1日のふり返りなどで使えるといい」、「短時間で集中して行えそうで良い」、「朝学習の時間にも取り組める内容だと思う」、「朝一番にやった方が、頭がさえる」、「算数の時間に授業最初の取り組みとして毎回行いたいと思った」の10点に要約された。本調査では「授業」を選択肢に入れていないが、算数の授業で取り組みたいという意見も多く見られた。そのため、選択肢の中から選ぶのであれば、時間を取れる学級活動で実施するか、短時間で集中して取り組む朝の会という選択が多かったものと推測される。

D. 黒板を写そうについて、通常学級での活用が4.32(2018年)であり、通常学級で黒板を写そうを活かしてみたいという結果であった。その理由についての自由記述を、AIテキストマイニングによる分析を実施し、ダイジェスト機能で出力した結果、「意欲的に取り組めることをしていきたい」、「きれいに書けない児童が多いと思う」、「通級でやっていただけるとありがたい実戦」、「どこの場面で時間がとれるのか」、「ふり返りがあるのがよい」、「だんだん字が上手になりそうで良かった」、「親との関わりがとても良かった」、「通常学級でも活用すべきだと思った」、「親子で見合うのは大変効果的だと思った」、「連絡帳を丁寧に書けるようになると良い」の10点に要約された。活用時間については、41.2%(2018年)が学級活動、35.3%(2018年)が帰りの会と回答している。それぞれの理由について自由記述が無記入であった回答が多かったため、詳細を分析することができないが、帰りの会と回答した理由については、「帰りの会で連絡帳を書く時に活用したい」と数名の記載があった。

E. お話ししようについて、通常学級での活用が4.24(2018年)、4.70(2019年)であり、通常学級でお話ししようを活かしてみたいという結果であった。その理由についての自由記述を、AIテキストマイニングによる分析を実施し、ダイジェスト機能で出力した結果、「メモづくりは非常に大事だなと思った」、「メモの仕方の説明をもう少しほしいと思った」、「朝のスピーチなどで行うことができそう」、「1分間は長く感じ、メモがあっても難しかった」、「考えをまとめて話す練習になると思う」、「指導の中では生かせるかなと思った」、「考えたり、話したりする力が鍛えられると思った」、「メモがあると、話が続けられることを実感した」、「どの立場で話作りをすればよいか分からなかった」、「このトレーニングはすぐにチャレンジしてみたい児童がいる」の10点に要約された。活用時間については、47.6%(2018年)、38.1%(2019年)が学級活動と回答している。また、33.3%(2018年)、42.9%(2019年)が帰りの会と回答している。それぞれの理由について、AIテキストマイニングによる自由記述の分析を実施し、ダイジェスト機能で出力した結果、学級活動と回答した理由は「時間をかけて指導することが効果的だと思う」、「自立活動のコミュニケーションの学習でもできるなと思った」、「複数のテーマで話をさせるなら、学活が良いと思う」、「学活で少し時間をかけてやっていくのが良いと思う」、「題を与えられるので自己表現が苦手な生徒にとっても取り組みやすいと思う」の5点に集約された。一方、帰りの会を選択したい理由は、「人前で話す機会を作ることは必要」、「ふり返りとしても使えると思った」、「今日一日の良かった出来事などを話す短い時間を作る」、「帰りの会で順番に1分間スピーチのような形で取り入れたい」、「帰りの会で自分の1日をふり返らせたり、自分を見直すことが出来ると考える」の5点に集約された。これらの理由から、1つの授業の中で集約して実施するか、毎日少しずつ実施するかの違いが表れたのではないかと推測される。

F. ペンシルドライブについては、通常学級での活用が4.52(えんぴつ運動)、4.54(字形バランス)であり、通常学級でペンシルドライブを活かしてみたいという結果であった。その理由についての自由記述を、AIテキストマイニングによる分析を実施し、ダイジェスト機能で出力した結果、えんぴつ運動については、「筆圧が弱い児童に行ってみたい」、「難しいですが、子供達は好きそう」、「低学年には必要な児童がいる」、「ゲーム感覚でできるところが良いと思った」、「筆圧が足りない児童がたくさんいる」、「幼児期にこういうのをやらせたい」、「特に低学年にやらせたい」、「楽しみながら自分で評価しながら出来ると思った」、「自分も夢中で塗っていた」、「こういうことが児童の力になるのだと思った」の10点に要約された。また、字形バランスについては、「書くという動きの基礎になる」、「低学年では、必須だと思う」、「すぐに、簡単に取り組み

そう」、「これも大切なスキル」、「時間を決めることで集中力もより増すと思う」、「これは、取り入れたい」、「自分の得意と苦手がわかってよいと思う」、「簡単で目標が明確なので意欲がわく」、「硬筆指導に役立てたい」、「字形が心配な子どももこれなら楽しく取り組めると思う」の10点に集約された。えんぴつ運転の活用時間については、34.8%が学級活動、30.4%が朝の会と回答している。字形バランスの活用時間については、37.5%が学級活動、25.0%が朝の会と回答している。それぞれの理由について自由記述が無記入であった回答が多かったため、詳細を分析することができないが、どちらも1つの授業の中で集約して実施するか、毎日少しずつ実施するかの違いが表れたのではないかと推測される。

2.5 質問紙調査のまとめ

質問紙調査の結果から、A. 紙風船づくり、B. スティック運動、C. 計算フラッシュ、D. 黒板を写そう、E. お話ししよう、F. ペンシルドライブの全てにおいて、自らが担当する学級での指導に活かしてみたいと考えていることが示された。また、活用時間に関する調査結果から、A. 紙風船づくりと B. スティック運動について、特に学級活動で実施することが望ましいと考えている教員が多いことが示された。C. 計算フラッシュ、D. 黒板を写そう、E. お話ししよう、F. ペンシルドライブについては、朝の会や帰りの会などの短い時間でも実施できると考えている教員も一定数おり、これらの活動については、朝の会や帰りの会で実施することを前提に検討することとした。

3. 考察

3.1 小学校特別活動の目標および特別活動で実施する意義

小学校学習指導要領19)によると、特別活動の目標は「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す」とされている。具体的には、(1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。(2) 集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。(3) 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを活かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。の3点が挙げられている。

本研究では、通常学級に在籍している「知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒」の集団適応力を高めるために、通級指導教室で実施している在籍校(学級)での生活に適應できるようにするための指導内容(トレーニング)を実施することで、インクルーシブ教育システムを構築し、SDGsにおける「質の高い教育をみんなに」の実現を達成できるのではないかという考えで進めている。このことは、特別活動の目標に合致しており、特別活動の中の「学級活動」で実施することが望ましいと考えている。

3.2 小学校特別活動における「紙風船づくり」の提案

1つ目の具体例として、小学校特別活動(学級活動)で「紙風船づくり」を実施する授業案を提案する。授業のねらいは、「人には得手不得手や様々な個人差があることに気づかせ、互いの協力で補うことができることを体得させる」、「相手に対しての気遣いや思いやりが大切であることを体得させる」、「互いに理解し合う気持ちが拡大し、学級集団が満足感を得られることを体得させる」とする。事前準備として、市販の折り紙(1人1枚・人数分)、紙風船づくりの手順プリント(人数分)、ワークシート(人数分)、厚手の色模造紙(大きな色模造紙を正方形に裁断し、巨大な紙風船を想定、班ごとに色を変える)を用意する。授業展開

例を表5, ワークシートを図3に示す。

表5 特別活動における「紙風船づくり」の具体的な展開例

流れ	学習活動	学習内容	指導上の留意事項・評価
導入 4分	学習のねらいを知る。4分	人には得手不得手があることを理解し, 互いに補うことで集団力が高まり, 満足感が得られることを体得する。	全員に得手不得手があり, 個人差があることを理解させる。 責任を押し付けず, 互いに協力し補うことで, 楽しさが拡大することを理解させる。 評価: ねらいを理解し, 前向きな気持ちがつくれたか。
展開 31分	紙風船づくりの手順を示したプリントで手順を確認する。 ① 3分間でどこまで進むか * 1分間は作成 * 2分間はワークシートに記入	① 個人体験 (利き手と逆・片手) * 低学年は, 利き手だけでも * 高学年は, 利き手と逆の片手で	紙風船の折り方については, あらかじめインターネット等から入手し, 手順を示したプリントを用意しておく。 ① 思うようにできないイライラ感やわかっていてもできないもどかしさを体験させる。 * ねらいを達成させるために, 時間を守らせる。 * 素直な自分の気持ちを自分の言葉で表現させる。 評価: 最後まで頑張ろうとしているか。
	② 8分間でどこまで進むか * 5分間は作成 * 3分間はワークシートに記入	② 隣の人と協力 * 互いに声掛けをする。	② 「手伝って, 教えて」が言えることの大切さを体験させる。 協力することで気持ちが楽になることを体験させる。 * ねらいを達成させるために, 時間を守らせる。 * 素直な自分の気持ちを自分の言葉で表現させる。 評価: 互いに声をかけ, 協力しているか。
	③ 10分間で協力し合って作成する * 7分間は作成 * 3分間はワークシートに記入	③ 生活班でビッグな紙風船をつくる * 班長がリーダーシップを発揮できれば	③ 全員で作成することを伝え, 協力する大切さを体験させる * 素直な自分の気持ちを自分の言葉で表現させる。 評価: 全員が参加しているか・参加を促す言葉が出ているか。
	④ 10分間生活班で紙風船で遊ぶ * 7分間は遊び * 3分間はワークシートに記入	④ 生活班で紙風船で遊び, 何回続けてできるか数えながら遊ぶ * 途中で各班の回数を発表する	④ 自然に班員が声を出しながら数えさせ, 連帯感や協調性を体験させる * ゲーム性の良さを生かし, 連帯感や協調性を高める。 * 素直な自分の気持ちを自分の言葉で表現させる。 評価: 笑顔で数えているか・失敗に対して励ましているか
まとめ 10分	ワークシートに取り組んで思ったことを書く10分	自分の言葉で素直に自分の考えを書く	①～④と感想を通して, 気持ちの変容を捉え, 今後の指導に活かす

3.3 小学校特別活動における「スティック運動（スティックロード）」の提案

2つ目の具体例として、学校特別活動（学級活動）で「スティック運動（スティックロード）」を実施する授業案を提案する。授業のねらいは、「相手と交互にボールを転がして渡すやり取りを通して、気遣いや協力等のコミュニケーションの基本を体得させる」、「スティックやボールの種類や形状を工夫し、様々な状況で対応経験させ、学級集団も様々な個性や考えを持つ集団であることを想起させ、適応する力を感覚的に養う」、「スティックが相手との気持ちの交流であることに気づかせ、コミュニケーションの基本であることを感覚的につかませる」とする。また、事前準備として、太さの違うスティック2本組み×班の数、大きさや形状の違うボール×班の数、ワークシート（人数分）を用意する。授業展開例を表6、ワークシートを図3に示す。

表6 特別活動における「スティック運動（スティックロード）」の具体的な展開例

流れ	学習活動	学習内容	指導上の留意事項・評価
導入 4分	学習のねらいを知る。4分	2本のスティックを水平に持ち、その上をボールを転がし、相手と往復させる	相手の取りやすさや戻しやすさを考える気遣いや協力を体験させ、コミュニケーションの基本であることを体得させる。 評価：ねらいを理解し、前向きな気持ちがつくれたか。
展開 31分	① 6分間やり方を練習する * 4分間は練習 * 2分間はワークシートに記入	① 隣の人と協力	相手がやりやすいように手前でスピードを落とすことに気づかせる スティックを水平に持つことに気づかせる * 素直な自分の気持ちを自分の言葉で表現させる。 評価：相手に対する気遣いがあるか
	② 6分間関わる人を増やしていく * 4分間2人組を交代しながら実施 * 2分間はワークシートに記入	② 生活班の中で2人組をつくり実施。一人のところは班内で自分たちで調整	2人組がすぐつくれるか 2人組のペアになる相手を自主的に増やしていく
	③ 6分間関わる人を変えていく * 4分間号車単位で2人組を交代しながら実施 * 2分間はワークシートに記入	③ 号車で前列から最後列まで順番に。一人のところは号車内で自分たちで調整	* 素直な自分の気持ちを自分の言葉で表現させる。 評価：相手を嫌がる素振りはないか実施する組数が増えていくことで、つながる意識を高めていく。
	④ 13分間クラス全員がつながる。 * 2分間、班単位で移動し、2重円をつくる * 1分間、やり方の説明を聞く * 8分間、全員がつながることをめざし実施 * 2分間はワークシートに記入	④ 全員で2重円をつくり、形が違う色々なボールを回す。 * 班ごとにスティックとボールのセットを用意しておく * 班単位で実施し、終わったら次の班に送る。内側の円は外側に、外側の円は内側につなげていく	* 素直な自分の気持ちを自分の言葉で表現させる。 評価：つなげようとする意識が高まっているか。 クラス全員がつながり、クラス意識を高める。 自然発生的な声援が起こるよう促す。 互いに気遣い、支え合うことの楽しさを体得させる。 * 素直な自分の気持ちを自分の言葉で表現させる。 評価：様々な人と関わる大切さを理解しているか。
まとめ 10分	ワークシートに取り組んで思ったことを書く10分	自分の言葉で素直に自分の考えを書く	①～④と感想を通して、気持ちの変容を捉え、今後の指導に活かす

やってみて、どうだった？

年 組 番 名前

1	実施したレク名	
2	① 何か思ったことは？	
	② 何か思ったことは？	
	③ 何か思ったことは？	
	④ 何か思ったことは？	
3	やってみて、思ったことは？	

図3 「紙風船づくり」「スティック運動 (スティックロード)」共通ワークシートの例

4. おわりに

以上、本研究では、通常学級に6.5%程度在籍していると考えられる「知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒」への対応を念頭に、学級全体の集団力や仲間意識、個々の集団適応力を高めることを目的に、通級指導教室で実施しているトレーニングを活用した小学校特別活動を提案する。提案にあたっては、教員研修において、通級指導教室で取り組んでいる学習プログラムを学級担任に紹介し、学級担任の意見をもとに、特別活動の内容を抽出した。以下にその結果をまとめる。

- ①紙風船づくり，スティック運動，計算フラッシュ，黒板を写そう，お話ししよう，ペンシルドライブの全ての学習プログラムが通常学級でも役に立つと，教員研修に参加した教員から評価されたことが示された。
- ②活用時間に関する調査結果から，紙風船づくり，スティック運動について，特に学級活動で実施することが望ましいと考えている教員が多いことが示された。
- ③計算フラッシュ，黒板を写そう，お話ししよう，ペンシルドライブについては，朝の会や帰りの会などの短い時間でも実施できると考えている教員も一定数いることが示された。
- ④紙風船づくり，スティック運動について，小学校特別活動における授業案を提案した。

これらの結果により、本研究では、通級指導教室で取り組んでいる学習プログラムを体験した教員が、これらの学習プログラムを通常学級における特別活動に活用できると考えたことが示された。そして、学級担

任の意見をもとに、特別活動の内容を抽出し、学級全体の集団力や仲間意識、個々の集団適応力を高めることを目的に、通級指導教室で実施しているトレーニングを活用した小学校特別活動を提案した。

学校現場では、以前から「耐性の欠如、人間関係の希薄化からの思いやりの欠如、そこから派生するSNS等の誹謗・中傷、いじめや自殺」等、課題が山積している現状である。そして「キレる児童生徒・発達障害」という言葉が教育の現場に登場して久しい。教職員は、常にその児童生徒を集団の一員として、支援しながら学習活動・学級活動等に取り組ませ、社会性を身につけさせる責務があると考えられる。

本研究で紹介した2年間の教員研修は、様々な立場で児童生徒に接する教職員に「気になる児童生徒や日々の学級集団」を想定させ、通級指導教室で実施している「学級集団適応」をめざしたトレーニングメニューを体験させ、効果が期待できるトレーニングを探る目的で実施した。また、実際に実施する場合、それぞれの現状で「どの時間帯に活用できるか」を想定した上での集計である。通級指導教室では、学級集団適応力を身につけさせることをねらいとして取り組んでいるが、最終的には児童生徒本人が、自分自身の課題に気づき、認め、社会生活・集団生活に適応しようとする気持ちと行動様式を身につけなければならないと考えられる。

小中学校の現場では「気になる児童生徒」の在籍が顕著になっている実態がある。集団を預かる学級担任等は、気になる児童生徒から起因する日々の課題に直面し、解決に奔走している実態がある。その児童生徒の中のわずかな人数が、通級指導教室に通ってくるのが現状である。学校集団生活を通して、社会性を育むことが主のねらいとするなら、学級というひとつの社会の中で様々な体験・経験を通して育むと言う考えを推進したいと考えた。

児童生徒が社会人になった時、どう自分をその環境の中で活かせるか、または認められ、バランスのとれた人間関係が送れるか、などについて、学級集団の中で訓練されるべきであると考えられる。現在学校は、「主体的で、対話的な、深い学び」が求められている。その実現のためには、集団生活に必要な「基本的身体機能・運動機能・コミュニケーション力」が素地であると考えられる。自分以外の同年代との関わり方の不得手さから、いじめなどの社会的な問題も発生し、コミュニケーション力を体得させることが直近の課題である。さらに、集団生活でマイナス要因になってしまいがちな「責める正義感」もある。学級集団行動や授業の学習活動で見受けられるのが、先生への「注意しても止めてくれませんか」、「並んでくれませんか」、「まだ終わっていません」、友達に対する「早くして」、「みんなが待っているよ」、「まだ終わらないの」、「先生に言うよ」などの言葉である。正義感からくる言葉のように捉えられるが、言われた本人は「自分のできないこと、苦手なことを責められた」と聞こえていると思われる。問題は、言われた本人がどう行動するかにある。多くの場合が、反発的な態度が表出してしまうのが現状である。

本研究で提案した通級指導教室のトレーニングを活用した小学校特別活動を実施することで、通常学級に在籍している「知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒」の集団適応力を高めることに役立つと予測される。そして、インクルーシブ教育システムを構築し、SDGsにおける「質の高い教育をみんなに」を実現するための一助となれば幸いである。

謝辞

本研究を実施するにあたり、希望研修の運営および参加された先生方、教育委員会の皆様、教員研修実施校の教職員の皆様には、調査をはじめ様々な面でご協力いただきました。ここに記して感謝の意とさせていただきます。

参考文献

- 1) 文部科学省・国際統括官付，“教育現場におけるSDGsの達成に資する取組 好事例集”，https://www.mext.go.jp/unesco/sdgs_koujireisyu_education/index.htm，（参照 2021.10.17）

- 2) 外務省, “持続可能な開発のための2030アジェンダ”, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/000270935.pdf>, (参照2021.10.17)
- 3) SDGs ジャーナル, “SDGs|目標4 質の高い教育をみんなに|すべての課題解決の為に”, https://sdgs-support.or.jp/journal/goal_04/, (参照2021.10.17)
- 4) 文部科学省・初等中等教育分科会, “共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)”, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321669.htm, (参照参照2021.10.17)
- 5) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課, “通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について”, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf, (参照参照2021.10.17)
- 6) 埼玉県教育局, “特別支援教育の現状と課題”, 通級担当初任者研修資料, 2015, pp.9
- 7) 内閣府, “平成25年版障害者白書(概要)”, https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h25hakusho/gaiyou/pdf/h1_02.pdf, (参照2021.10.17)
- 8) 土居裕士, “通常学級におけるインクルーシブ教育の方向性に関する一考察:三つのデザインによる補完”, ノートルダム清心女子大学紀要・人間生活学・児童学・食品栄養学編, 第45巻, 第1号, 2021, pp.12-21
- 9) 酒匂まどか, “インクルーシブ授業をつくり出す視点:「すべての子どもたち」という言葉に着目して”, 鳴門教育大学国際教育協力研究, 第14巻, 2021, pp.61-68
- 10) 伊藤基晴・伊藤大河・山本利一, “小学校通級指導教室に通う児童の社会適応力を育てる教育実践-相互性のあるコミュニケーション能力の向上を目指して-”, 『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』, 第15号, 2016, pp.1-8
- 11) 伊藤基晴・伊藤大河・山本利一, “小学校通級指導教室に通う児童の会話力を育てる教育実践-音声認識と3Dキャラクターを用いたバーチャル会話トレーニング-”, 『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』, 第16号, 2017, pp.9-15
- 12) 伊藤大河・伊藤基晴・山本利一, “小学校通級指導教室における聴覚認知トレーニングの開発と評価—言葉の聞き取りが難しい児童の困り感の解消に向けて—”, 『埼玉大学紀要教育学部』, 第67巻, 第1号, 2018, pp.215-223
- 13) 伊藤大河・伊藤基晴, “学級レクを活用した通常学級に在籍する発達障害の可能性のある児童への支援-通級指導教室における学習プログラムの活用-”, 『共栄大学研究論集』, 第16号, 2018, pp.29-40
- 14) 伊藤大河・伊藤基晴, “通級指導教室の効果を高める親子ペア学習の試行”, 『共栄大学研究論集』, 第17号, 2019, pp.17-27
- 15) 伊藤大河・伊藤基晴, “通級指導教室の学習プログラムによる不器用さの軽減”, 『共栄大学研究論集』, 第18号, 2020, pp.99-114
- 16) 「昨年度いじめ倍増の9092件 国調査前回比 基準の明確化浸透」, 『朝日新聞』朝刊, 2017-10-27, 13版, 埼玉西部面
- 17) 「文科省:小学生暴力最多10年で6倍 感情抑えられず」, 『毎日新聞』デジタル版, 2017-10-26, <https://mainichi.jp/articles/20171027/k00/00m/040/139000c>, (参照2021.10.17)
- 18) 株式会社ユーザーローカル, AIテキストマイニング, <https://textmining.userlocal.jp/>, (参照2021-10-24)
- 19) 文部科学省, 小学校学習指導要領(平成29年告示), https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf, pp.183-189, (参照2021-10-24)